
可愛い先輩のあしらいかた

楓蘭 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可愛い先輩のあしらいかた

【Nコード】

N4099I

【作者名】

楓蘭 仁

【あらすじ】

ある日彼女が出来た高校二年生の俺。その彼女は年上の、三年生の先輩だ。オレ流に、上手く付き合っていこう。そんなほのぼのストーリー！。

ある日の昼休み。人通りの少ない廊下にて。
俺は捕まってしまった。学校で結構美人というか、人気のある先輩に捕まり、引きずられる様に連れていかれた。

「確か、…青葉…あおば…由里、ゆうり先輩ですよね？」

クラス内の情報をあまり知らない俺でも知っている名前。

「う、うむ」

いやうむって。

……まあ、いいや。

「えー、何かご用件でもおありでしょーか？」

文法も気にしない適当な返事を返しておく。

「あー、その、なんだ…」

「……………」

「き、君の事は、私からすると…か、かなり評価が高いワケであつてだな…」

「はあ…?」

「そのー、今日は、気分がいいんだ。今だったら…その…あれなんだ!」

先輩、何言ってるか一般人の俺にはさっぱりなのです。

「…えーっと?」

少し難しい顔で俺は聞き返す。

「ええい!物分かりの悪い奴め!嫌われるぞ!」

あのー?何故怒られる?俺が怒りますよ?

「今日の私は、寛大だ。その、だな…、す、杉岡修すぎおかしゅうという男と、…
恋仲になってもいいのだが……」

どんどん声が小さくなって、最後の方はほとんど呟きみたいになっていた。……まあ聞こえたけどね。

……そーかそーかそーいう事か。さすがに展開は読めたぞ。ここまですべてで感づかない奴はよっぽどの策士か馬鹿だろうね。

「せーんぱい」

気軽に呼びかけ、

「今日は気分がいいから、ですよね？」

確認。

「そ、そうだ。気分、だな」

答える先輩。

「もし、明日にして、って言ったらどうします？」

俺は人をいじめるのが嫌いだ。

でもいじるのは大好きだ。

さーどってくる先輩。

「あ、明日も、その…一日中、気分を…よく…」

先輩ー、お顔が真っ赤ですよー。最後の方よく聞こえませんでしたよー。

いやー可愛いなーこの先輩。しかもこのノリだったら、明後日は？とか、明後日は？って聞いても終わんないだろうなー、…等の先輩の考えを考慮して。

「じゃあー、付き合っちゃいましょうか先輩。」

クラスメートには悪い事考えていそうだと評判の笑顔をつくって返事をする。

「い、いいのか！？いいんだな！？あ…、お、お前がそこまで言うのなら……」

先輩、可愛いですけどベタ過ぎです。…という意見は心の中にしまっておこう。

「いやー、こんな綺麗で可愛い先輩と付き合えるなんて嬉しい限りデスヨ」

お世辞っぽくなってしまいが、結構本気で言ってみたりする。

175Cm弱の俺に対して、頭のとっぺんが俺の首くらいまでの身長。流れる様な黒髪はどこか凜としたものを感じ、若干人より鋭い眼をしていて威圧感があるイメージ。………だったが、今はそれをひっくるめて全部可愛いと思っている。

「は、はは、恥ずかしい事を、へ、平気で言うんじゃない……ナイ……」

顔が真っ赤っかになるゆーり先輩。だから後半聞こえないってば。まあ、なんかこの先輩をちょっとわかった気がするぞー。

「せんぱいせんぱい、しつれいしますねー」

クイツ、ギュツ、なでなで、よしよし。

一連の流れで先輩は俺の胸の中さー。人肌があっただかいと思う季節になったもんだ。

「……あ、…あ、え…?…あ………?」

あら先輩、大丈夫? 応答願います。

「先輩? セーんーぱーい?」

なでなで、よしよし。

結局先輩を離れたのは15分後くらいだった。

付き合って一週間も経たないが、やっぱり先輩が有名人の証拠というべきか、クラス内で最近出来たカップルを知らない奴は居なくなっていた。

そんなある日の朝。

「修、行こう。朝だぞ。」

普通に部屋に入って、俺を起こしにくるゆーり先輩。

「あー……んー……、あ？ゆーり先輩。おはよーっす」

大変ですねー、すみませんねー、毎回毎回。

「ほら、早く起きろ。遅れるぞ。」

あー、面倒くさいっすよー。布団があったかいんすよー。

「ということで、先輩一緒に寝ましょう。今ならまだあったかいっすよー」

さあ、カモン！と先輩を誘ってみる。

「お、おお、お、お前には、じ、常識と言うものがないのか！？こんな時間に！！」

そう言われたので、

キュッ

と俺のベッドの近くに立つ先輩の手を握り、

「じゃあ、夜なら、先輩は特に拒まない。……………ということでよろしいですかね？」

目をじっと見ながら、例の悪い笑顔で微笑む俺。

「……………えと……………その……………」

真っ赤な顔で口をパクパクさせて、なんとか喋る先輩。

……………ちょっと朝から刺激が強かったかもしれない。素直に反省しておこう。

パツ、と手を離しながら、

「ほら、先輩。俺は着替えますけど先輩はどうします？着替え見えます？」

ん？と、優しい口調で言ってみる。

「……………！！そ、外で待ってる！いい、急がなくても大丈夫……………だから……………」

そう言いながら、カチャツ、とドアを閉めて出ていく先輩。

……………あの人やっぱり可愛いなー。今度何かお礼をしよう。何がいーだろうか？

着替えながらそんな事を考えている俺。形として残る物にするか、記憶として残る事をするか……………。

……………まあ適当に、焦らずゆっくり考えるとしよう。

「ゆーり先輩。改めておはようございます」

モムモムとおにぎりを食べながら挨拶。うん、美味しい。かーさんのおにぎりは最高だ。

「お、おはよう。：食べながらでいいから、行こう」

「了解了解」

並んで歩き出す。

まあこの時間とこのペースでなら15分前くらいには着くだろう。余裕だ。

普通に歩いて、校門の近くまで来た。登校中でも、青葉由里という一人の女性の人望の凄さがわかる。

「由里さんおはよー」

「おはよう」

「由里先輩おはようございます」

「うむ、おはよう」

「青葉ちゃん、ノートありがとねー」

「またいつでも力になるぞ」

……とまあ、こんな感じ。そして今の挨拶もとい、お礼で20人ちょっとくらいに声をかけられた。いやー、すごいねー。さすが生徒会の会計だったか書記だったか。関係あるのかどうかは知らないけど。と、2つ分のおにぎりちょうどを食べ終わった俺の感想。本人いわく、人に優しくするのは当たり前、との事。良くできた人だ。

「あ、ゆーり先輩、昼休みはどうします？」

靴を履き替えながら、聞いてみた。

「今日は……すまん。生徒会の仕事があるから……すまん……」

顔がめっちゃめっちゃ曇るゆーり先輩。

「そんなに落ち込まないでくださいよー。放課後遊びましょー」

俺からの提案。

「そ、そうか。……そ、の、だな、お弁当を作ったん、だ……た、食べてくれないか……？」

少々震える手でお弁当を差し出すゆーり先輩からの提案。

……あれ、マジで？ いいの？

お弁当とゆーり先輩の手を優しくにぎり、

「喜んで」

例の笑顔。

「あ、ああ、……ありが、とう……」

真っ赤な顔でうつむくゆーり先輩。

……そろそろ時間も近づいてきたので、教室に向かう。

二階が二年生、俺の教室がある階。

三階が三年生、ゆーり先輩の教室がある階。

二階で一度立ち止まり、

「あ、ゆーり先輩」

「な、なんだ？」

呼びかけに答えるゆーり先輩。

スッ、と近づき、

「放課後、楽しみにしてますよ」

耳元でソッと囁く俺。

「!?!?」

驚いた顔で俺の方を見るゆーり先輩。

「んじゃあ、また放課後。先に終わったら校門で待ってますよー」

軽く手を振った後、ルンルン気分で教室に向かう俺。

チラッと見たら、めっちゃギクシャクした動きで階段を上っていくゆーり先輩。

…………別に変な意味は無いんだけどね。

多分今の俺は悪そうな、だけど喜んでいそうな雰囲気になっている。

…………はず。

この後教室に入ったら、殺意の満ち溢れた男子達の眼光で睨まれた。
一部始終だけだと勘違いしそうな内容だったしね。

…………突然襲われなきやいいんだけどなー。

昼休み、待ってましたよ、お弁当。

b y 杉岡修

一句作った所で、お弁当タイム。すごく腹が減ったのだ俺は。

早速お弁当をオープン。

……おお、メインディッシュはハンバーグだ。肉と野菜のバランスが絶妙そうなお弁当だ。

それではいただき……ま……すす？

ふと後ろを振り返ると、

いろんな意味でギラギラした男子がいっぱい。

………どーしようか。

少なくとも自分の体とお弁当は死守しなければ。特にゆーり先輩のお弁当は貴重だ。今日に限ってこれだけは本気で譲りたくない。

- ・ 全力で逃げる
- ・ 知らないふりをする
- ・ 思い切って戦う

↓やっぱり逃げる

ガタツ、と席を立ち。

「忘れ物しちゃったー、取りにいかなくてはー」

そう言った瞬間弁当を持ち、今までの人生でベストな走りで逃げた。
後ろから物凄い声が聞こえた気がしたが、聞く耳なんか持ち合わせていないのだ。

……うん、弁当美味しい♪

クラスメートを適当に流していたら、放課後になった。

ゆーり先輩との約束があるのにも関わらず、授業中に言った教師の一言の所為で気分があまりよくない。

校門ではゆーり先輩が待ってくれていた。俺の方が早いかと思ったんだけど……まあいいか。

「ゆーり先輩、お待たせしました」

「そんなに、待ってないから…大丈夫だぞ」

いやー、朝からすみませんねー。いろいろお手数かけちゃって。

「それで、突然で申し訳ないのですが……」

「どうした…？君らしくない…ぞ？」

「今日……遊べなくなりました…」

暗い雰囲気を出して言う俺。

「……そ……う……か。じ、事情があるなら…仕方、ない…な………」

落ち込み方が尋常じゃない先輩。

……さすがに可哀想になってきたので、

「いやねー、来週から学期末テストやるじゃないですかー。俺このままだとだいぶマズいらしいんですよー。だ・か・ら、今日は俺の部屋でお勉強会をしましょう。明日明後日休みだーって思うと、一人だとやる気出ないんですよー」

もちろん、手伝ってくれますよね？と、続けると、

「な、なな、なんだ、そ、そそそ、そういう事、だよな。わ、わか
っていたさ、私も、そう言うつもり、だったから……」

わかりやすいですよー先輩。そういう先輩が好きなんですよー。

……先輩の心境を考えて口には出さないけどね。

じゃあ行きましょうか。と、先輩の手を引いて歩き出す。男子生徒
には自慢するように、堂々と歩く。ふふん、いいだろう。

「その…なんだか、緊張するんだが…」

「?なんでです?」

俺の部屋に入って、先輩の第一声。

「いつも朝起こしに来てくれてるじゃないですか」

と、聞くと

「き、君が、最初から起きてるのは、初めて…だから」

との事。

「まあまあ、楽にしてください。そして勉強を教えてくださいただければ
すごく嬉しいです」

例の笑顔で、ニコニコしながら言う俺。

「わ、わかった。……よし、勉強は何を教えればいい？」

おお、先輩が珍しく落ち着いている。

「わからない事は、私がわかる範囲で答えてやろう。……何を教え
ればいい？」

頼りになるなー、さすが学校で10位以内に入る頭だ。

……よし、じゃあ……

「保健体育」

言ってみて2〜3秒くらい経つと、

ボツ！！

と音が本当に聞こえるくらいの勢いで顔が赤くなったゆーり先輩。

「まま、ま、ま、待て、修。そ、その、嫌というわけでもないんだが、心の、準備というものがだな、その、な……」

いつもの倍くらい早口で話す先輩。

「あの…すみません、冗談です…。普通に数学ですから」

悪い気がしなくもないのでやめておいた。

「……ああ！わ、わかっていたSA！」

先輩、キャラが変わってきてますよ…。

「じゃー勉強しましょうかー。数学のここなんですけどねー」

「どれどれ……」

………

「ここは……この公式を当てはめて、だな……」

「んやー…なるほど……わかったような気がするぞー……」

なんとなくだが、わかるようになってきたぞ。先輩の手前だしちょっと頑張ってみようかなーと思ってしまう。

「……あ、先輩。18時回りましたがけど門限とかあります？」

ふと時間が気になったので聞いてみる。

「……ありがとう。でも心配しないで勉強を続けてくれ……ほ、本当の事を言うと、わ、私はな」

「あ、先輩。問題解きました。やったね」

わーい、答え一人で出せたー。

「そ、そうか。じゃあいい時間だし私はこれで……」

スクツ、と立ち上がる先輩。……と俺。

「じゃあ問題も解けたところで、先輩の言いかけた事を最後まで聞きましょうか」

先輩の出口、俺の部屋の扉を遮るように、俺は立つ。

「な…にも、ない。だから…どいてくれ、ないか……？」

うつむき加減で、上目づかいで聞いてくる先輩。……いろんな意味

で反則ですよー。

「……言う気がないなら、ちょっと強引になりますよー」

ミシリ……ミシリ……と、割ときれいな俺の部屋に音が響く。

少しずつ俺は先輩に近づき、先輩は俺から少しずつ離れる。

トン

と、先輩の背中が部屋の壁にぶつかった。

先輩の後退はそこで止まってしまふ。が、

俺の進行は止まらない。

先輩との距離をどんどん詰め、最終的には、目の前に立つ。

左手をスッと伸ばし、先輩の顔のすぐ隣の壁に手を当てる。

ゴクリと息を飲む音。

それでも先輩は、俺から見て右に逃げようとする。が、

スッ

と、今度は俺の右足がピッタリと壁につく。
簡単に、人一人を閉じ込めた。目の前に先輩の綺麗な顔。距離は、

おそらくタバコ一本分……くらいだと思う。吸わないからよくわからない。

「なんか、非常に逃がしたくないです」

先輩の息づかいが聴こえる。真っ赤な顔で、少しだけ荒い息。若干震えて、……少し熱さを感じるが、目は俺を、しっかりではないが捉えている。

「……離して……くれない……か？」

か細くて、触れるだけで壊れそうな、繊細な声。

しかし

「なんでですか？」

俺も、今まで生きてきた中で、おそらく一番優しい声色で聞く。

「……………」

何も言えずに、うつむく先輩。

「……俺の事、嫌いですか？」

「そんな事！……ない……」

一瞬だけ、大きい声だった。

「じゃあ、何？」

距離を保ちつつ、サラッと聞く。

「さっきの……続きで……だな……」

「うん？」

「…君と…一緒にいる口実が出来て……………嬉しい……………本当に、それだけだ……………」

まあ、聞き出さなくてもなんとなくわかってたけどね。
俺は先輩の口から聞きたかっただけ。

「由里先輩」

名前を呼ぶ。ビクッ、と少し震えたのがわかる。

「弁当、すげーおいしかったですよ」

ニコーツと笑顔

「……？…そ、そう、か。それは…よかった」

呆気にとられた表情で、返事を言う先輩。

「んじゃーちよつと……」

タバコ一本分から少しずつ顔を近づけて、

「…え？……ふ！……ん………」

さつきよりも、強く体を震わせて驚いたようだった。

それでも、自分の身を俺に任せて、目をキュッと閉じて、俺の肩をぐっと掴む先輩。呼吸が上手く出来ない様で、時折鼻から空気が抜ける音がする。……正直、興奮した。

そして俺はカクカクと震えて、安定していない先輩の腰をそっと抱いて、優しく、唇を重ね続ける。……本当に、優しく……。

けっこう時間が経ったと思ったけれど、たいして経っていなかった。……まあでも、内容としてはかなり濃い時間だったと思うよ俺は。正確には一分ちよつとかな。

「あー、先輩先輩？大丈夫ですかー？」

いまだ密着状態の俺達。別に先輩に悪い、とかは全く思っていない。

「だ、い…ひよふだ…」

やばい、大丈夫じゃない。

……………まあいいか。

「弁当のお礼なんですけど……いますぐ、ってわけにもいかないんでちょっと時間くださいね」

そう告げると、

「……じ、じゃあ、い、いみゃの、き、キスはなんひゃ!？」

呂律が上手く回ってない先輩。そんな先輩に俺は、

「俺がしたかったからです」

キッパリと言い放った。

「……………」

「……………」

お互い無言で、ちょっと待っていると

「ゴホッ！ゴホッ！……き、君は……いじわるだ…」

一度むせてからちゃんと話す先輩。

「よく言われますよー。先輩と初めて会った時からこんな感じを貫いてますよ俺は」

先輩が初めて俺を見た時も、俺はクラスメートをいじって遊んでいた。その時たまたま、偶然先輩と目があって、俺は例の笑顔で先輩に微笑んだ。……その時の楽しそうな俺の笑顔を、先輩は忘れられないらしい。

「そ、そうだけど……その……いきなりは、びっくりするだろう…が…」

弱々しく物言いする先輩。

「……由里先輩。それでも嫌ってわけじゃない、ですよね？」

お互いに目を見て話す。

「っ！……………」

コクリと小さく頷いて、肯定してくれた。

「由里先輩のそういうところ、可愛くて大好きですよ」

ははー、と笑いながら言った。

「！！！！~~~~っ！！！！」

いつも通り顔を真っ赤にする先輩。

腰をクイツ、と抱き直して

「先輩は俺のどこが好きですか？」

ストレートに聞いてみる。

「ひ……み……つだ…」

声を振り絞って、なおかつ俺の発言に反抗している感じの先輩。

「じゃあまたちょっと強引に聞いてみますね」

さっきの体制をすっかり立て直してから、俺と先輩の距離はさっきみたいに縮まっていく。

「し、修！？ちょっと！待っ……！！………」

俺と先輩の関係は、今後こんな感じだったらいいなー。

……という願望が、より一層強くなった1日だった。
いやー楽しかった。

F
i
n

(後書き)

ノリで書き上げたちょっと実話シリーズ第8弾。今回のテーマは「攻め」と「受け」です。書いてて一番ノツた気分の作品でした。そんな性格の作者です。

最近少々忙しいので、更新出来なかった事をふかーく反省しております。申し訳ございません。えーっと、

「面倒な事になった」

「冷たくて静かな彼女」

「彼女の隠れてた本性」

「クールな彼女と穏やかな日常」

1000ヒットを突破致しました。

読者の皆様には感謝いっぱいでございます。この作品も色んな方が読んでくれたらいいなあと思います。

最後までお読みくださりありがとうございます。今後も応援していただければ幸いです。

ご評価、ご感想をいただけると作者は狂喜乱舞します。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099i/>

可愛い先輩のあしらいかた

2010年10月10日03時05分発行